心に響く 校長講話 ▷70◁

永池 啓子 横浜市立白幡小学校校長

紅梅白梅 先駆けて咲く花

水の国日本、日本の四季ほど美しく、自然がその豊かな移り変わりを見せてくれるものはありません。都市部の狭い校庭でも然り、地方では、うらやましいほどの環境が広がっています。子どもたちの最も近いところにあって四季の変化を見せてくれる植物を題材に、生き方や考え方を示したり、それを基にして生まれた文化などを紹介したりするのも講話のポイントになります。

本校には、毎日子どもたちを迎え入れ、見送ってくれる紅梅・白梅が校庭にあります。生活科では豊かな実を付けてくれるため、子どもたちが梅ジュースにもする大変身近な木です。寒さの中で春に向けて力強く芽を出し耐えている草花があります。その草花や春一番に花を咲かせる〝梅〟に、私たちは心を寄せていかなければと思います。子どもたち（朝会）や保護者・地域（「学校だより」など）と、相手に応じて引用の仕方や話し方は異なります。ここでは題材として紹介します。

寒中に咲く、早咲きの梅のことを〝寒梅〟と呼んでいます。新島襄氏の「寒梅の詩」を紹介します。

庭上一寒梅
笑侵風雪開
不争又不力
自占百花魁

（通釈）「庭先の一本の梅の木、寒梅とでも呼ぼうか。風に耐え、雪を忍び笑っているかの様に、平然と咲いている。別に、争って、無理に一番咲きを競って努力したのでもなく、自然にあらゆる花のさきがけとなったのである。まことに謙虚な姿で、人間もこうありたいものだ」

風雪に耐え、どの花よりも一番先に咲いた梅を「寒梅」と称し、苦節試練に耐えながらも、争わず、無理をせず、終始ゆとりを持って自然体で、ついにおのずから世の先駆者・指導者となった人物に例えたものです。

襄自身の体験、実感を詠んだものです。（「趣味の漢詩」から）冬枯れの校庭、一番先にかわいい蕾（つぼみ）を膨らませ、春の香りいっぱいに子どもたちを迎え入れる梅の木、その生きる姿を、未来を担う子どもたちに贈りたい。